矢作川水源の森トラストプロジェクト～市民で作る水源の森づくり～

流域は運命共同体！水を使う者が自ら水を作れ！こうした理念を中下流域の市民が実現した物語。

活動を始めたきっかけ

1，東海地方を豪雨（2000 年 9 月）が降り、大きな水害をもたらした！！

2000 年 9 月 11～12 日にかけて，名古屋市を中心とした東海地方が，台風 14 号の影響により活発化した停滞前線（秋雨前線)による集中的な豪雨に見舞われ、名古屋市およびその周辺（中京地区）で豪雨災害（水害）起こった。都市水害の恐怖を実感させる大きな被害で話題になりました。

山崩れが各地で発生し矢作ダムも土砂や流木で埋まり、矢作川上流の山も大きな被害がありました。

谷に集まった雨は急流となり、沢を削り取り立木もろとも大量の土砂を洗い流し（沢抜け)、根が浅いスギ・ヒノキの森で被害が甚大でした。矢作ダムも大量の土砂と流木で埋まりました。

その後、全国各地で同様の水害が頻発しています。

平成12年東海地方を襲った豪雨で、矢作川研究所が山崩れの起こった山を調査した結果、以下のことが分かりました。

【調査結果】

① ヒノキの人工林が 67%(47 箇所)を占める

② 被害地は急傾斜地、38 度以上が 73%（51 箇所）を占める

③ 林床の表土が流失し、細根が露出している森林が 80%（56 箇所）を占める

④被害林ではひょろひょろの人工林 61%（37 箇所）を占める（線香林）

この調査から、「人工林間伐手遅れによる荒廃が災害発生の確率が高いといえる。」と結論付けました。

矢作川水源の森トラスト事業　～水を使うものが自ら水をつくるべきである～

安城市は、矢作川の水の恩恵を受けて、農業・工業・商業が発展した町です。特に、明治用水の完成で農業が盛んになりかつては日本のデンマークと呼ばれるほどでした。

今、矢作川流域の山々は、全国の例にもれずスギ・ヒノキの放置林となっています。東海豪雨は、

荒れた山を生態系豊かな森に戻すことが急務であることを教えてくれました。そして、最も大切なことは、すぐに行動に移すことです。山は広大です。気が付いた人から行動することが最も需要です。荒れた山は待ったなしです。

2, 組織の立ち上げ

平成11年、安城市では、環境首都をめざし、地球温暖化対策地域協議会を立ち上げ、市民による環境活動に取り組む 15 グループが参加、協議会名を「エコネットあんじょう」とし、規約を定めて主に安城市内で環境活動を開始しました。

3, 矢作川水源の森トラストプロジェクト立ち上げ

私たちは、「水を使う者は自ら水をつくれ」の理念のもとに、矢作川の水源地である長野県根羽村の山林12ha を市民の力で、購入する計画を立てました。「矢作川水源の森トラストプロジェクト」です。

矢作川の水源守ろう

根羽村(長野)の奥山購入へ

NPO法人

エコネットあんじょう

安城市のNPO法人「エコネットあんじょう」は、同市を流れる矢作川や明治用水の源流に当たる長野県根羽村の奥山の買い取りに向けて動きだす。個人や企業から寄付を募り、貴重な森林を保護するトラスト運動で「水源を守る大きな力にしたい」としている。(紙山直泰)

矢作川などの源流がある長野県根羽村の奥山を買い取る運動を始めるエコネットあんじょうの神谷輝幸事務局長＝安城市で

トラスト運動、寄付募集

今月二十三日、エコネットは安城市で、水源の森を守る学習会を開いた。講師は、森林保護の専門家で広島大総合科学部の中根周歩教授。翌日には中根教授と会員ら十七人が、県境に近い長野県根羽村の水源を見学した。エコネット事務局長の神谷輝幸さん(七〇)は「ナラやブナなど自然林が茂り、沢があり、水源のシンボルになる」と保全の意義を説明。山の所有者の根羽村と購入に向けた交渉を進める考えを確認した。今後、市民らに寄付を呼び掛け、十三ヘクタール前後の購入を検討する。

安城市も根羽村の奥山で森林の育成に協力し、村と収益を分け合う分収林を持つ。こうした縁もあり、市もトラスト運動に理解を示し、本年度、エコネットに調査費として五十万円を交付。これまでにエコネットは村側と三回勉強会を開いた。

神谷さんは「標高八〇〇㍍の水源は、人の手が入りにくい森。そのまま自然林として残したい」と話している。

トラスト運動　自然環境を開発から守るため、市民の寄付で土地を買い取る運動。日本ナショナル・トラスト協会(東京)によると、国内で50団体ほどが取り組み、計約1万㌶の森林や湿原、里山などを保護している。昨秋、安城市のNPO法人「森を再生する会」が奥三河の設楽町の奥山1.8㌶を200万円で購入し、活動している。

左の記事は、平成23年8月24日中日新聞朝刊に掲載されもの

購入予定地は、矢作川の上流、根羽川、小戸名川と名前を変えて支流が流れる渓谷。年中絶え間なく清らかな水が流れる。源流の一滴から渓流へと水量が増える様子が観察できる。広葉樹豊かな山は、「緑のダム」を実感できる場所である。「水源の森トラスト地」として保全する

このプロジェクトの目的は、次の二つです。

① 水源の森を水の受益者で水源地を持つことの重要性を市民につたえること

②「水道の蛇口をひねる時、何時も上流の森を想え」。この理念を市民伝えること

この事業の活動資金を得やすいように、寄付者に税額控除の特典がある認定特定

非営利活動法人として登記の手続きを進めました。その理由は、矢作川の水源地である長野県根羽村の山林12ha を購入するために1200 万円の資金が必要になったことです。

活動内容の詳細

以下、「矢作川水源の森トラストプロジェクト」の活動内容を紹介する。

Action 1 【フォーラムで水源の森づくりの重要性を市民に伝える】

水の受益者を代表して安城市長、水源地を代表して根羽村村長、生態系豊かな森づくりに取り組む森山まり子会長、そして多くの市民の参加のもとに、明治用水土地改良区会館でフォーラム開催ました。「流域は一つ、運命共同体」の理念のもとに、両自治体が、連携して、水源地を守る約束をしました。

Action 2

【安城市・根羽村交流会―上流・下流の市民の交流を深め「流域社会をつくる」】

清流での川遊び、マスの塩焼きなど都会にいては味わえない貴重な体験を味わった。毎年、安城市では味わえない大人気のイベントとなっている。

水源の森の水を味わう

トラスト地を歩く

五平餅を味わう

Action 3

【矢作川源流桧原川で川遊びと地元の人々との交流を図る験！】

清流での川遊び、マスの塩焼きなど都会では味わえない貴重な体験を味わった。毎年、大人気のイベントとなっている。

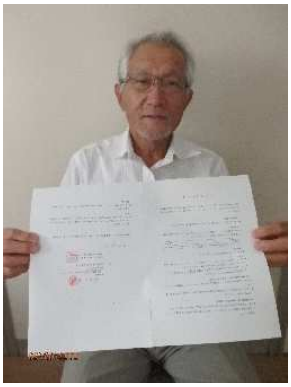
Action　4

【矢作川水源の森トラストの契約書を交わす】

市民で作る水源の森づくり「矢作川水源の森トラストプロジェクト」を始めて 10 年、市民の寄付金が 1200 万円に達しました。寄付をいただいた人は 3000 人を超します。このプロジェクトを理解し、それぞれ熱い思いがこもっており、その願いを私どもに託された感じです。

ある高齢の女性は、その昔、明治用水のおかげで農業ができたと水の大切さを身に染みた感想を添えて 50 万円という高額寄付を寄せられた。名前も伏せて領収書も不要という申し出。この清らかで崇高な気持ちに感動したのも良い思い出でした。

水のありがたさ、その水源地に思いをはせることの重要性をこのプロジェクトに取り組むことでにより、市民の皆さんにある程度伝えることができた、と関係者一同安堵しています。



「水を使うものが自ら水をつくるべきである」と、初代安城町長（初代明治用水理事長）岡田菊次郎翁が呼びかけて 100 年近く経過しますが、今私たちが、そのご遺志をしっかりと受け継ぎましたと報告したいと思います。同時に、後世の人たちにも崇高なご遺志を伝えていくことをここに誓いたいと思います。

☜契約書を手に誓いを新たにする竹本和彦理事長

Action　5

【安城市民の命を守る水源の森保全を求める請願書採択、そして実現へ】

令和元年１２月１日、安城市議会議長あてに「安城市と根羽村の分収育林を広葉樹林に転換し、水源の森、環境教育林として市民が親しめる森づくりを推進し、保全していただきたい。」との請願書を提出し、採択いただきました。

その結果、令和 4 年 4 月、分収育林集育林事業は、令和 4 年 3 月を持って終

了し、新たに「矢作川水源の森環境育林事業」が根羽村と安城市の間で締結されました。

環境育林協定では、従来の「水資源の涵養・森林資源の保護」だけでなく、「安城市民への還元」、「SDGs への貢献・啓発」を目的に掲げ、これらを達成するために、森林整備、矢作川上下流域の自治体間交流に加え、現在の人工針葉樹林から、針葉樹と広葉樹の共生を図る「針広混交林への転換」を軸とした事業に取り組みます。針広混交林への転換は、30 年から 60 年といった長い期間に渡り、間伐、植樹、害獣対策など、地道な管理を要します。そうした森づくりの一端を、矢作川上下流域の住民の皆さまと協働し、木育などの体験を通じて、水の大切さや森林の役割の理解を深め、次世代へ引き継いでいく環境教育活動を推進しています。

今後の目標

今後は、「矢作川水源の森トラスト地」を活用して、流域社会の実現を目指してプロジェクトの一層の推進に努めたい。具体的には、

① ブナ・ミズナラを主木とした生態系豊かな水源の森づくりをする。現在は、炭焼き用の二次林の雑木林である。植生調査の結果、ブナ主体の落葉広葉樹林が成立しうる環境であり、山頂付近にはブナ林があります。茶臼山山頂付近にはミズナラもあります。ブナは水源林のシンボルでもあります。現在、ブナ、ミズナラのどんぐりを現地で拾い、苗づくりを始めている。今後、苗が成長した暁には「水源の森記念植樹」をしたい。

② 根羽村は、人口減少で空き家屋が増えている。夏の避暑地としては最適である。空き家を活用したクラインガルテンとして安城市民が活用できる施設にできたらと思う。

③ 矢作川水源の森トラスト事業を市民に伝える活動の推進

私たち「エコネットあんじょう」は、培った環境活動の経験を生かして安城市指定管理者施設である「柿田公園・里地」の環境拠点施設「エコきち」で市民を対象に環境学習事業を実施している。「エコきち」における環境学習の一環として啓蒙活動をする。下記のパネルは現在「エコきち」に展示されている水循環の説明である。（柿田公園管理事務所「エコきち」HP= https://www.ecokichi.net/）

④その他の目標

〇行政との連携による市民のための水源の森づくりを進める。

〇明治用水土地改良区との連携による水源の森づくりを進める。

〇矢作川水源の森トラスト地、安城市茶臼山野外センター、安城市・根羽村分収育林の一体化を図り、環境教育林の実現を図る。

〇パンフレット「矢作川水源の森」の活用（別紙資料）

トラスト地の渓流をさかのぼると「安城市茶臼山野外センター」があり、毎年、安城市の中学1年生が山の学習を行う場所がある。

私たちは、「水道の蛇口をひねる時、何時も上流の森を想え」という願いを込めて、中学生が森の大切さを学べるように、パンフレット「矢作川水源の森」を作成し、中学校に配布した。

また、DVD「命の水は、矢作川水源の森から生まれる」を作成した。トラスト地に足を運ぶことは容易ではない。そこで、水源の森が私たち都市部に住む者にも大変重要であることを体験できるように、DVD「命の水は、矢作川水源の森から生まれる」を作成した。

トラスト地を流れる渓流は、年中清らかな水が流れ、渓流沿いに佇むと、流れる空気はうまい。この地から水とうまい空気がわがふるさと安城に運ばれて来ることを実感できる。

矢作川水源の森トラスト事業を支えるその他の活動

エコネットあんじょうの会員で、矢作川水源の森トラスト事業を支える活動をしている例を紹介する。

1，特定非営利活動法人森を再生する会の活動

【設楽町裏谷西川における水源の森づくり植樹活動】

愛知県設楽町西川（斉藤和彦さん所有の山林）における林層転換事業を 2001 年から始めた。樹齢50年ほどのスギを伐採し、広葉樹に変えるのは心が痛む。伐採した木は売らないのですかと山主に聞くと、「赤字だよ」と寂し気な答えが返ってきた。山が荒れ放題になる理由がわかった瞬間だった。

植樹のあと、畠山重篤さんの講演を開催した。

「森は海の恋人」

畠山重篤さん講演会

森は海にとって大切な存在。豊かな自然を守りたい。

プロフィール
畠山　重篤（はたけやましげあつ）
牡蠣養殖業を営む。牡蠣の森を慕う会代表。1989年より植林活動を開始。子供たちを養殖場に招き体験学習を行っている。1994年朝日森林文化賞受賞。著書「森は海の恋人」は教科書教材としても使われている。

海を守るために始めた森づくり

2006年10月21日「森は海の恋人」と題して講演をしていただいた畠山重篤さんは、牡蠣養殖業を営む漁師。海の環境を守るため広葉樹の森づくりを始めました。

「海にはもうひとつの森があります。海の森、その答えは「植物プランクトン」にあります。植物プランクトンは動物プランクトンのえさとなり、それをオキアミや小魚が食べ、食物連鎖によりさらに大きな魚であるカツオ、マグロが食べます。したがってマグロを養うには膨大な量の植物プランクトンが必要なのです。豊富なプランクトンが発生するには上流に広葉樹の森がなければ育ちません。鹿児島湾と東京湾の漁獲量はどちらが多いでしょうか？ 自然の豊かさから推論すれば鹿児島湾ですが答えは東京湾です。理由は、鹿児島湾には川が流れ込んでいないのに対して、東京湾には川が流れ込んでいるからです。つまり、上流の森からの栄養分で育つプランクトンが東京湾にはいるので魚も多いのです。これが「森は海の恋人」といわれる由縁です。」海と森の関係を分かりやすく話してくださった畠山さん。海を守るには森を守る必要があると教えていただきました。

12

植樹のあと、「森は海の恋人」の著者である畠山重篤さんが、「森の腐葉土がつくるフルボ酸が鉄養分を海に運び、プランクトンを増やして海を豊かにする働きがあるので、「森は海の恋人」といわれる」と、森の重要性を三河の奥山から語ってもらいました。

森を再生する会が放置林を購入し、水源の森づくりをはじめる

自分たちの山を持って"水源の森"を次世代につなぎたい

恵みに生きて

暮らしと生物多様性

都市から遠い源流の奥山を買い取り 水と木の実と動物の楽園をつくろう

森を再生する会

愛知県安城市

愛知県境に近い奥三河地方の一角。スギの人工林が覆う、うっそうとした森で、せせらぎが小さな沢を潤している。「沢ガニがいるよ」「水は甘い感じがするね」。弾む声が森に響く。

今月19日、NPO法人「森を再生する会」（愛知県安城市）、会員約150人の主な人数メンバーらが同県設楽町の、ある奥山に足を踏み入れた。取得を検討している山を下調べするためだ。案内人に導かれ、沢沿いを登ること約1時間。頂上近くの候補地に着いた。そこは標高約800～1000メートル。天に向かって伸びた木立が急峻な斜面にへばりついていた。

「沢があるので水源のシンボルになる。美味しいね」。好印象を持った理事長の神谷鎌吉さん（70）は管理を取る方向で所有者と交渉していくことをメンバーらと確認し合った。

◇

奥三河地方の山間部は、安城市など西三河地方を流れる矢作川の水源域に当たる。だが、全国的な例に漏れず、戦後の「拡大造林」で少なからずスギやヒノキの人工林につくり替えられた。とりわけ手入れしにくい奥山は放置され、荒れた状態。保水機能は低下し、豪雨時に所々で崩壊も起きていた。神谷さんは地元から遠く離れていても、命の水でつながっている関係から、とても人ごととして片付けられず、多様で豊かな森に手入れをしてもらいたいと8年前、会を発足させた。これまでこの地方で500本を超える広葉樹の植樹や間伐の活動を続けている。

一方で、山の取得も当初から順調に入れていた。「場所によっては私たちの活動を理解してくれないケースもあった」。奥山に小さな菜園をつくることで人間の生活圏と一線を引ければとも考えている。

◇

数年前から何カ所かの候補地を探し回り、ようやく有力な場所を見つけられた。「日本でトラスト活動は未だまだ浸透していない。ちっぽけな動きだし、わずか面積だが、ここから"水源の森"としてメッセージを発することで共鳴者が少しでも増えてくれれば」。神谷さんはそう願っている。

取得のめどが付けば、適度な間伐をしそして広葉樹を植え、後は自然の再生力に任せていく考えだ。どんな山になるのか楽しみ。メンバーらは口々にたちの森が次世代の宝物になることを夢見ている。

写真・兵藤公治

ペン・松本宣良

※「恵みに生きて」は今回で終了します。

左の記事は、毎日新聞記事に掲載（平成 22 年 9 月 17 日金朝刊東海ワイドに掲載された

樹齢40年ほどのスギ・ヒノキの人工林、今は放置林となっている。

昭和 30 年～40 年に行われた拡大造林政策で植林されたが、木材価格が下落し、間伐等手入れがされなくなった。

この山を買い取り、市民で、生態系豊かな水源の森づくりをしている。

＜会として山林を購入した理由＞

水源の森づくりを開始した当初は、会員の山林を借り、放置林を広葉樹の森に転換する活動を行った。設楽町西川の斉藤和彦さん所有の山林、続いて新城市作手の小河智彦さん所有の山林を借用して水源の森づくりを行った。樹齢50年ほどのスギを伐採し、広葉樹に変えるのは心が痛む。先祖が植林したスギ・ヒノキを伐採して、山に放置する。山主に売らないのか尋ねると、儲けどころか赤字だという。木材価格が外材に押され、どうしようもないのが現状だということが分かった。間伐が進まないのは、間伐材が売れないから毎日の生活が成り立たなくなったという。植林した当時は、間伐材の需要があって、それで生活できるという楽しみがあった。その後、建築・土木で使う材料が木材からコンクリート、鉄などに変わったということもり、間伐材の需要がなくなったこともある。

一般的には山主にとっては、水源の森づくりは、利害が反する。生活の足しにならないのだ。

「水を使う者が自ら水をつくるべきである」とは、初代明治用水理事長岡田菊次郎翁の言葉で、翁は、実際、長野県平谷村・根羽村の水源地に山林を購入している。私たちも翁の教えに則り、設楽町納庫に2ヘクタールの山林を200万円で購入。水源の森づくりを始めた。40年生のスギ・ヒノキの放置林を会員で伐採、広葉樹を植樹している。

植物生態学者宮脇昭先生からいただいた激励のメッセージ

植樹活動も間違えば自然破壊につながる。植樹は生態学者である宮脇先生の「ふるとの木によるふるさとの森づくり」の理論に基づいて森づくりを行っている。

私たちの植樹活動に対して宮脇　昭先生から以下のようにメッセージをいただいた。

日本一多く木を植えた男

植物生態学者　**宮脇　昭先生**

確固たる理論と経験から、土地本来の森を調べ、世界中の森林を再生し続ける植物生態学者宮脇昭先生。私たち「NPO森を再生する会」が師と仰ぐ先生は、これまで3,000万本以上の木を植え、今もポット苗を手に邁進し続けています。

講演会後の懇親会(2004.8.28)

2004年8月28日、宮脇先生の講演会が行われました。先生の話には常に情熱と教訓が満ちあふれています。「森が死んでいるのは、人間の心が荒れている結果なのでは？　死んだ森を魂の森に蘇らせよう！」こんなメッセージが聞こえてきました。

助成いただいている団体様へ、宮脇昭先生からの推薦文

財団法人イオン環境財団理事長　岡田拓也　殿

代表者神谷輝幸氏は安城西中学校長時代から土地本来の森の再生に地域の皆さんと熱心に取り組み、学校の森作りなどを進めてきました。

この度「森を再生する会」を設立され、従来のスギ・ヒノキ・マツ造林の間伐、下草刈などの作業から前向きにふるさとの森づくりを積極的に進めようと計画しています。そのヒントはイオン環境財団の万里の長城の森再生プロジェクトに12も参加、又近くの三好町のジャスコ店植樹祭にも大勢で参加して得ています。生態学的にも正しい理解と理念の下に積極的に矢作川の水源の森づくりを計画推進しています。

貴財団の目指されている方向にも適合していると考えられます。愛知県安城市から世界に向けて小さくても着実な森づくり活動を市民が主役となり進め、発展させるためのひとつの起爆剤として貴重なご援助を仰ぐのにふさわしいプロジェクトの一つとして推薦申し上げます。

財団法人国際生態学センター　研究所長　宮脇　昭

プロフィール

財団法人
地球環境戦略研究機関
国際生態学センター長
宮脇　昭（みやわき・あきら）

1928年、岡山県生まれ。広島文理科大学生物学科卒業。ドイツ国立植生図研究所で潜在自然植生理論を学び、横浜国立大学教授、国際生態学会会長などを経て、1993年より横浜国立大学名誉教授、(財)国際生態学センター研究所長。紫綬褒章、ブループラネット賞受賞。「植物と人間」(毎日出版文化賞受賞)、「日本植生誌」「森はいのち」「森よ生き返れ」「木を植えよ！」など著賞多数。植樹指導は国内外計1,500カ所以上、3,000万本以上にのぼる。

（森を再生する会４周年記念パンフレットより抜粋）